

田舎に元気を

地域住民と移住者の共生によるまちづくり

まちづくり活動部門 研究員 坂本 耕紀

愛媛ふるさと暮らし

応援センターの開設

団塊世代をはじめとして、本県への移住交流を促進するため、昨年9月10日に「愛媛ふるさと暮らし応援センター」（以下「応援センター」）が開設されて4ヶ月程が経過した。



ふるさと回帰フェア in 大阪

地域住民と移住者の関わり

19年度の取組のうち、情報発信のひとつの手段として、首都圏及び関西圏の都市住民へ向けてのPRが挙げられる。昨年10月に東京及び大阪で開催された「ふるさと回帰フェア'07」に出展した際、愛媛での暮らしに興味を持っている都市住民の方々と話をする機会を得た。

「おかえり愛媛」の製作をはじめとして、様々な情報発信を行うなかで、少しずつではあるが相談件数も増え、愛媛への移住交流に興味を持ってくださる方が増えていることを実感する。

これまでに、応援センターへ移住交流

に関する様々な相談が寄せられた。漁業に関すること、就農や農的暮らし、また田舎での住まい、就職に関することなど、その相談内容は多岐にわたるが、応援センターが愛媛に興味を持ってくださる方とのファーストコンタクトとしての役割を担うだけに、その責任とやりがいを実感する日々である。

「田舎」の概念がずいぶん違うということである。例えば、松山市のような人口50万人超の地方都市も「田舎」だと言い、「社会インフラの整った地方都市に住むこと」田舎暮らし」と捉えている方が意外と多いのである。一方では、田園風景が広がる自然豊かな地域に暮らすことが田舎暮らしだとする都市住民も多数いることから、多様化する田舎暮らしのニーズに呼応した取組が必要であると感じた。

第二には、市町の移住支援制度など、経済面の優遇策ばかりに目が向くあまり、地域社会、すなわち、そこに暮らす地域住民や地域の慣習といった根っこの部分に対する、都市住民の認識に違和感を覚えたことである。

こと移住となると、移住者はお客様ではなく、また、地域もお客様をお迎えするのではない。移住者も地域社会を形成



ふるさと回帰自治体相談コーナー（東京）

する一員となるからこそ、まずはその地域やそこに暮らす住民に目を向けてほしいと思うのは、私だけだろうか。

また、11月に開催した、県内の既移住者等で構成する「移住サポーター・ネットワーク会議」の中でも、地域住民と移住者の意識の相違といった意見が多く出された。

一概には言えないが、田舎の生活というものが相互扶助で成り立っている以上、地域社会との関わりは不可欠である。移住者が、その地域で充実した生活を望むなら、まずは共同清掃やお祭りなど地域の行事に積極的に参加し、自ら地域

社会に関わっていくとする前向きな姿勢がなければ、その移住は徒労に終わる可能性が高いのではないだろうか。

一方、受入側となる地域住民の意識改革も必要である。高齢化により地域社会そのものを維持していくことが困難となっている過疎地域においては、その集落機能を維持するためにも、移住者を積

極的に受け入れようとする意識を持つことが肝要である。よく田舎は閉鎖的といわれるが、移住者が持ち込む新しい発想や都会で培われた経験を、地域で生かすことができれば、集落機能の維持はもちろんのこと、埋もれた地域資源の再発見につながる、ひいてはその地域自体の魅力に磨きがかかるのである。

地域で暮らす住民自身が、誇りを持っている地域こそが、移住希望者にとっても魅力を感じる地域といえるのではないだろうか。

本県においても少子高齢化が進み、いわゆる限界集落が増加の一途をたどるなか、移住促進事業を地域活性化のひとつのツールとして有効に活用するためには、双方が意識と目的をしっかりと持ち、たうで共存共栄を目指すこと、すなわち、地域住民と移住者の「共生」こそが大切だと思う。

移住交流施策とまちづくり

07年を振り返ってみると、団塊世代の大量退職という時代背景の後押しもあって、都市住民が自然や癒しを求め、その目が「ふるさと」や「田舎暮らし」に向いた年であった。

先述の「共生」という言葉だが、入賞こそ逃したものの、07年を象徴的に表現することばを選ぶ「新語・流行語大賞」

の候補語にノミネートされた。

応援センターの専任職員として移住促進に携わり、多様な移住希望者と接するなかで、地域住民と移住者との「共生」を強く意識することとなった07年。私にとっては、この言葉が07年の象徴であり、08年においてもキーワードであることは間違いない。

* * *

本県における移住促進の取組は、まだ緒に就いたばかりだが、地域に元気と希望をもたらし、活力あるまちづくりの一助となる取組でなければならぬ。08年は、移住者の視点だけでなく地域に暮らす住民、その地域を形成する資源といった、多様な視点を持つて、取り組んで行かなければならないとの思いを新たにしているところである。



四国4県で実施した
“癒しの国・四国”交流・定住フェア（東京）